

《新企画》

# なぜ50代男は 孤立死する



ノンフィクションライター  
橋由歩

＝②＝

兄は弟の  
ことを完全  
に忘れてい  
た。

「兄弟の『疎遠歴』が30年なんてのは、ぼつぼつおるよ」

遺品整理業「キーパーズ」社長の吉田太一さん(47)は、静かに話す。

「これは名古屋のケースだけど、兄が実家の二戸建てに妻子と住み、弟はそこから5000円しか離れていないアパートに住んでいるのに、30年も会っていない兄弟がいました」

当時、弟は55歳、兄は59歳。弟はアパートの一室で、死後6カ月で発見された。

「この兄弟は大学を出てから、1回も会っていない。だから兄は、弟が何の仕事をしていたのか、どんな人生を送ってきたのか、そこに住んでいたことさえ、全く分かりませんでした。孤立死した弟の情報が全くなかった」

吉田さんは「独身の弟は、兄の生活をうらやましいと思っていたのではないかと推測する。だから、惨めな自分を見られたくないと思っていたのではないかと……」

## 熟年離婚の男の部屋に残された家族写真

ことになるのなら、ちよつとぐらい声を掛けてくれたらよかったのに」と兄は言うけれど、死んだから言えることでしょうか」

吉田さんによれば、それは「パンドラの箱を開けること」なのだ。借金など、とんでもない災いを自ら招いてしまい、自分の家族の平穏な生活が崩れることを恐れるからだ。こうして兄弟は疎遠なまま、その関係が固定化していく。

一方、別れた妻が子どもと一緒に遺品整理を手伝いに来ることもある。夫がリストラされ、妻に熟年離婚されたケースがほとんどだ。大抵、妻はこう話す――

「こんな生活してるなら、両掛けてくれれば、食べさせてあげたのに。私はどうでもいいと思ってるけど、この子の親だから」

家族の写真が飾られていても、妻と娘は一瞥をくれるだけ。

「女がいたとしても、金がなくなり捨てられて、そんな男は大抵、エロビデオの山に埋もれ、パソコンにデジタル動画はつかり取り込んでいる」

それを見ても、妻は「お父さんもバカよね」と淡々としたものだという。部屋には、家族の写真が後生大事に飾ってある。未練がましいのは、男なのか。

(つづ)

※「年金では生きられない」は休載します

